

全国都市緑化かわさきフェア 開催レポート

寄稿：建設緑政局

グリーンコミュニティ推進室 担当係長 井上 剛

緑政部 みどり・多摩川事業推進課 担当係長 辻 良亮

富士見・等々力再編整備室 主任 福堀 光也

※寄稿者の所属は現所属であり、全員、開催時は緑化フェア推進室に所属し、取組に携わった。

1 開催概要

川崎市は、多摩川に沿った地形の中で、豊富な水資源を背景に臨海部を中心として工業が発展し、徐々に北部へ都市開発が進み、利便性の高い都市へと成長してきた。都市化の進展に伴い、多くの樹林地が失われたが、市民、企業、行政等の多様な主体の連携・協働により、緑の保全及び育成、創出の取組が進められ、現在は地域に即した多様な自然環境が川崎市の魅力の一つとなっている。また、環境先進都市として、SDGs達成や脱炭素社会実現に寄与する取組を積極的に進めている。

こうした川崎の持つ歴史、資源、強み等を活かし、改めてみどり*について市民と一緒に考え行動する

ことで、川崎の新たなみどりの文化を醸成し、誰もが住み続けたいまちへとつなげていくため、市制100周年の象徴的の事業として「第41回全国都市緑化かわさきフェア」(以下「かわさきフェア」という。)を全国初の二期(秋・春)で開催し、“川崎らしいみどり”を全国に向け発信した。

かわさきフェアでは、次の三つの基本理念を定めた。「みどりが持つ力を、未来の川崎に向けて、みんなが暮らしの中で上手に活用する取組を推進する」、「川崎の多様な人・暮らし・みどりを結びつけることで、フェア終了後も続く『みどりのムーブメント』を推進する」、「かわさきフェアのレガシーとなる地域愛を持った市民が、次の100年に向けて、川崎らしくより豊かな環境をつないでいく」である。基本理念が示すように、かわさきフェアは、次の100年を見据えたアクションのきっかけづくりとして、市制100周年の節目を川崎の新しい未来に踏み出すチャンスに活かした大きな挑戦であった。

開催規模は、秋春を通じて約162万人が来場し、経済波及効果は県内で約135.2億円、うち市内で88.7億円に達した。100周年記念事業と合わせた協賛金は約2億7,400万円(換算額含む)となり、全国レベルの花と緑の祭典にふさわしい規模で実施された。

概要

- 【名称】第41回全国都市緑化かわさきフェア
- 【愛称】「Green For All KAWASAKI 2024」
- 【テーマ】「みどりで、つなげる。みんなが、つながる。」
- 【秋開催】令和6年10月19日(土)～11月17日(日)
- 【春開催】令和7年3月22日(土)～4月13日(日)
- 【コア会場】富士見公園、等々力緑地、生田緑地
- 【ロゴマーク】

みどりをツールに、人と人、人と暮らしが緩やかにつながっていく様子を、区の数である7枚の葉を重ね、市民の活動(アクション)がさらに広がっていくイメージを、多彩な色でロゴ全体を花に見立てて表現



Green For All
KAWASAKI 2024
第41回 全国都市緑化かわさきフェア

2 開催までの歩みとコンセプト

令和2(2020)年2月、これまでの100年を振り返り、次の100年に向けて、より豊かな環境をつないでいくきっかけとするとともに、全国へ川崎のみどりを発信するため、全国都市緑化フェアの開催誘致を

※みどりの考え方…かわさきフェアでは、生物多様性がもたらす「基盤サービス」(光合成、栄養循環、水や空気の浄化)・「供給サービス」(食料や資源の供給)「調整サービス」(暑熱化の緩和や災害軽減)・「文化的サービス」(精神充足、レクリエーション)の4つの「生態系サービス」も含めた多様な機能と効果を「みどり」として捉えるものとする。

なお、漢字の“緑”は、「川崎市緑の保全及び緑化の推進に関する条例」第2条第1項に基づき、樹木等の植物、樹林地、水辺地、農地等の自然的環境を有する土地及び空間並びにそこに生息する動植物の育成基盤である土、水等の自然の要素をいう。

市長記者会見で表明した。同年4月には緑化フェア担当を新設し、本格的に準備を開始した。学識者や幹事会委員との対話を重ね、市民意見募集や議会説明を都度進め、基本構想、基本計画骨子、基本・実施計画など節目となる計画を策定していく中で、かわさきフェアの根幹となるコンセプトを磨き上げなが

ら、実施内容を具体化していった。

令和4(2022)年9月、「川崎市市制100周年記念事業・全国都市緑化かわさきフェア実行委員会」を設立し、実行委員会は様々な企業、団体、行政等のオール川崎市で構成され、設立後は主体となって、地域や学校等とも連携しながら準備を進めた。会場にとどまらず、周辺エリアや市内全域で取組や広報を積極的に展開し、開催に向けて着実に機運を高めていった。

かわさきフェアのコンセプトは、みどりが持つポテンシャルを効果的に活用し、これまで培ってきた川崎の強みや各地域の特色を活かしながら、各分野の取組と連携し、多様な主体がつながり、行動するきっかけとする「市民総参加型」のフェアとなるよう、「Green For All!みどりのムーブメントを起こします」と設定した。

また、コンセプトに基づき、次の五つの基本方針を定めた。「川崎の多様なみどりの“力”を感じるフェア」、「先端技術で新たな都市緑化の“形”をつくるフェア」、「多様なみどりでつなげる“行動”を生み出すフェア」、「環境・社会・経済的価値を同時に実現できる“社会”を示すフェア」、「川崎らしい多様性あふれる“文化”を育むフェア」である。これらの方針には、川崎らしい都市の中のみどりの価値が込められており、これらの方針に基づき、川崎だから実現できる「川崎らしいみどり」を発信した。

3 オープニングイベント及び総合開会式

秋春の二期にわたるかわさきフェアの幕開けとして、令和6(2024)年10月に富士見公園でオープニングセレモニーを晴れやかに開催し、日本造園組合連合会青年部が制作したトラックガーデンも披露された。

オープニングセレモニー後は、カルッツかわさきにて約1,000名の招待者を迎え、総合開会式を開催した。公益財団法人都市緑化機構理事長による開会宣言で式典が始まり、続いて実行委員会会長である川崎市長が主催者挨拶を行い、国土交通省、神奈川県、川崎市議会から祝辞が寄せられ、かわさきフェアの開催意義と期待が改めて示された。



テープカット

主な経過

【令和元年度】

令和2年 2月 開催誘致表明

【令和2年度】

令和2年 4月 建設緑政局緑政部みどりの協働推進課に緑化フェア担当を新設

令和3年 3月 全国都市緑化かわさきフェア基本構想を策定

【令和3年度】

令和3年 4月 建設緑政局緑政部緑化フェア推進担当(課相当)を新設

令和4年 1月 全国都市緑化かわさきフェア基本計画骨子を策定
国土交通大臣による開催同意

【令和4年度】

令和4年 4月 建設緑政局緑化フェア推進室(部相当)を新設

令和4年 9月 川崎市市制100周年記念事業・全国都市緑化かわさきフェア実行委員会設立総会及び第1回総会を開催

【令和5年度】

令和5年 6月 市立小・中・特別支援学校での花苗育成プレ栽培を開始

令和5年 8月 全国都市緑化かわさきフェア基本・実施計画を策定

令和5年 9月 協賛募集を開始

令和5年10月 ボランティア募集を開始

令和5年11月 開催1年前イベントを市役所本庁舎で開催

令和6年 3月 春開催1年前イベントを等々力緑地で開催

【令和6年度】

令和6年 5月 開催150日前イベントを生田緑地ばら苑で開催

令和6年 7月 開催100日前イベントをラゾーナ川崎プラザで開催

令和6年 9月 市立小・中・特別支援学校全校で「協働の花づくり・花かざり」を開始

令和6年10月 第41回全国都市緑化かわさきフェア(秋)開幕

令和6年11月 令和6年度全国都市緑化祭開催

令和6年11月 第41回全国都市緑化かわさきフェア(秋)閉幕

令和7年 3月 第41回全国都市緑化かわさきフェア(春)開幕

【令和7年度】

令和7年 4月 第41回全国都市緑化かわさきフェア(春)閉幕

アトラクションとして、後述する各コア会場と式典会場を結ぶライブ中継を実施し、開幕の様子を共有することにより会場間の一体感を高め、かわさきフェアは正式に幕を開けた。

4 三つのコア会場

会場設定については、臨海部から多摩丘陵まで地域ごとに様々な顔を持つ川崎の多様なみどりを活用して、会場を全市的に展開したいと考え、その核として、市内の南・中・北部に位置する本市の代表的な三つの総合公園をコア会場に設定した。会場ごとに地域資源や特色を活かしてコンセプトをとりまとめ、これに基づき、会場整備や催事、ステージプログラムを展開し、三つのコア会場から、それぞれの「川崎らしい都市の中のみどりの価値」を発信した。

また、会場整備に当たっては、花卉の準備では、市民協働による花苗育成や市内産花卉の優先調達を行うなど、地域の力を結集した。さらに、会場内の飲食・物販では、使い捨てプラスチックの使用を可能な限り抑制し、容器のリユース・リサイクルを徹底するなど、環境に配慮した取組も実施した。

(1)富士見公園

かわさきフェアのタイミングでリニューアルオープンした富士見公園では、フェアを代表する会場として、



おもてなしのフラワーゲート
(富士見公園)

本市の発展を支えてきた多様性の価値とみどりを掛け合わせ、「多様性×みどり」をコンセプトに、都市の中のみどりを立体的に表現し、身近にみどりを取り入れる要素を織り交ぜた展示、農と自然をテーマにしたガーデンを制作した。

メインガーデン「Colors, Future Garden」は、工業都市としての発展の歴史と、みどり豊かな環境先進都市としての未来を象徴する空間となった。工場モチーフと波紋のように広がる幸福の花畑が、様々な「多様性」を認め合い、新しい文化をつくってきた川崎の次の100年に向けた歩みを表現し、来場者を迎えた。夜間にはガーデン全体を包み込むライトアップを実施し、フォトスポットとして多くの来場者が

楽しんだ。

このほか、全国の自治体出展花壇や各庭園出展コンテンツなど、様々な団体が参加し、会場を彩った。

(2)等々力緑地

かわさきスポーツパートナーが本拠地を構え、日頃からにぎわう等々力緑地では、「体験・体感×みどり」をコンセプトに、五感で感じるみどりのアクティビティを展開し、みどりの持つ新しい価値を発信できるよう各種展示を行った。

「ACTIVE GARDEN」では、全長75mの五感を使って楽しむ体験・体感型の空間を設け、みどりの素材を生かした楽器や木登り感覚で楽しめるアスレチックなど、40以上のシカケを設置し、遊び尽くせるガーデンを制作した。また、等々力緑地の資源を活用して、全長100mに及ぶかわさきフェア



アクティブガーデン(等々力緑地)

最大の地植えのナチュラルガーデンを制作し、さらに、「21世紀の森」では、市内の保育園児が絵を描いた傘アートや、小学生が制作した竹あかりなどで彩った。また、ティラノサウルス大運動会、ツリークライミング、クロススポーツパークなど、行催事にもアクティブな要素を取り入れ、来場者を楽しませた。

(3)生田緑地

市内随一の豊富な自然環境を保ち、遺跡なども残され、緑地内に個性豊かな文化施設が立地する生田緑地では、「文化・歴史×みどり」をコンセプトに、人と自然がつながることの大切さを実感してもらうとともに、市民活動によって守り育まれてきたみどりの価値を発信できるよう各種展示を行った。

生田緑地内の竹を使い、地域の方々と創り上げた「竹のエントランスゲート」のほか、高さ30mを超えるメタセコイア林では、霧と、緑地内で制作した藍染を使ったインスタレーション^{*1}で会場を彩った。

秋開催では「生田緑地ばら苑」も会場の一つとし、日頃か



藍と霧のメタセコイア(生田緑地)

らボランティアが守り育てている色鮮やかなバラとともに、協働による「花づくり・花かざり」の花壇、かつてあった水路を花やビー玉、ミラー等で再現した「思い出のカナール^{※2}」などの特別演出を施し、来場者を迎えた。

5 全国都市緑化祭

令和6(2024)年11月、カルッツかわさきにおいて、佳子内親王殿下の御臨席を賜り、フェアの中心的事業である「令和6年度全国都市緑化祭」を開催した。記念式典では、佳子内親王殿下からお言葉を賜ったほか、出展コンテストの表彰や小学生による都市緑化宣言を行った。

式典後、佳子内親王殿下は、富士見公園内を御視察され、主催者や来賓、各出展コンテスト受賞者、中学生とともにサクラ「舞姫」をお手植えされた。また、全国都市緑化祭の御臨席に併せ、かわさきフェア会場である生田緑地ばら苑、川崎市立日本民家園、かわさき宙(そら)と緑の科学館及び川崎市 藤子・F・不二雄ミュージアムを御視察いただいた。



全国都市緑化祭

6 総合閉会式

令和7(2025)年4月、カルッツかわさきにて約1,100名の招待者を迎え、かわさきフェアの総合閉会式を開催した。式典のハイライトとして、川崎市長から「みどりのKAWASAKI宣言」を發表し、100年先の未来に向けた都市緑化への誓いが示された。最後に、次期開催地の岐阜県へのフェア旗の引継ぎと都市緑化機構理事長による閉会宣言をもって、秋・春合計53日間にわたるフェアは幕を閉じた。

みどりの KAWASAKI宣言

～100年先の未来への誓い～



100年前、多摩川流域にみどりが広がるこの地で産声を上げたこのまちには、京浜工業地帯の中核として発展していく中で、市民や企業など多くの皆様とともに力を合わせ、様々な環境課題を乗り越えてきました。

私たちは、自然とともに生き、成長することの大切さを理解し、気候変動や生物多様性など、世界が直面している様々な課題に対して真摯に取り組み、持続可能なよりよい社会の実現を目指します。

今日ここに、私たちは、豊かなみどりを守り、育て、親しみ、人々が心豊かに暮らす100年先の未来に向けて、川崎でともに暮らし、働き、学ぶ全ての人々とともに、つながりの輪をさらに広げ、新たなステージへと歩みを進めていくことを誓います。

◆

- 1 多摩川や丘陵地など、貴重な自然を保全・活用するとともに、まちなかにおいても、自然とふれあう、つながりあるみどりを生み出すなど、生物多様性の豊かなまちづくりを進めます
- 1 川崎らしい歴史・文化を未来につなげる魅力的なみどりの拠点づくりを進めるとともに、市民や企業など多くの皆様とグリーンコミュニティを育て、未来につなぎます
- 1 身近な地域から地球規模にわたる様々な環境問題、社会課題の解決に向けて、みどりが持つ価値と川崎が誇る多様なポテンシャルを掛け合わせ、人と自然が共生する幸福な社会の実現を目指します

令和7年4月13日
川崎市長 福田 紀彦

みどりのKAWASAKI宣言

7 市民総参加型のかわさきフェア

【学校の参加事例「協働の花づくり・花かざり」】

かわさきフェアの大きな特徴の一つは、市民総参加型のフェアであった点である。その中でも、大きな取組として「協働の花づくり・花かざり」がある。市立小・中・特別支援学校170校で育てた花苗を、かわさきフェア会場やまちなかにかざることによって、子どもたちが地域やまちに興味を持って関わるきっかけづくりを目指した。こうした学校参加型の取組は、令和7(2025)年度も継続しており、子どもたちが小さな苗から花を育て、市内の70公園以上で花がかざられている。

【ボランティア活動】

かわさきフェアでは、開催前の事前ボランティア活動に市内外から延べ269名が参加し、ボランティア参加者を中心に、駅前花壇や各コア会場での花壇づくりなど精力的な活動が行われた。また、秋会期前には生田緑地ばら苑において、地元企業と近隣中学生が合同で花植え活動を実施し、参加者同士の積

※1 インスタレーション…特定の空間に様々な物体を配置して、その空間全体を作品とする手法。また、その作品。

※2 カナール…運河。水路。



協働の花づくり・花かざり



会場内でのボランティア活動



ありがとうの木

極的な交流が図られた。

花を前に自然と会話が弾み、ガーデニングや家庭菜園等、共通の趣味の話を通じて、参加者同士で楽しみながら作業している姿が非常に印象的であった。

最終的なボランティア登録者は、10代から80代までの幅広い年代にわたり、合計458名となった。登録者の約85%が市内在住者であり、県外からの参加も見られた。特に20代までの登録者が約24%を占め、若い世代に多く登録いただくことができた。若者が地域と関わりながら成長を実感できる機会となるよう、各学校に募集情報を提供し、希望者にはボランティア活動証明書を発行したことが、この結果につながったものと考えている。

会場運営ボランティアは、会場内の案内やベビーカー、車椅子の貸出、ボランティアセンターの運営

補助などを担当し、一方、植物管理ボランティアは花壇の維持管理を担う造園のプロから手ほどきを受け、見頃の過ぎた花を摘む作業を行った。参加の動機は人それぞれだが、開催期間中、様々な年代の方とともに活動することで、世代間交流にもつながった。会場ごとにボランティアが自発的に活動内容を考え、春の富士見公園会場ではボランティアによるガイドツアーも実施され、来場者をもてなした。また、活動中の感想を共有することを目的に、各会場のボランティアセンターに設置した「ありがとうの木」は、参加者同士がそれぞれの想いや経験を知るきっかけとなり、コミュニケーションを促進する役割を果たした。

秋開催後に企画したボランティア交流会には110名が参加し、秋開催の他会場の様子を共有しながら、春以降の活動に向けて積極的に意見交換する姿が印

インタビュー

プロジェクト初期から終了まで 見届けた木村室長に聞く！



■全国初の二期開催をはじめ、異例づくめの 緑化フェアを経験して

かわさきフェアは、川崎市制100周年という節目に、「川崎らしいみどり」を最大限に発信するための挑戦でした。市制記念日の7月に地ならしをし、10月（秋開催）で種をまき、翌年3月（春開催）でグランドフィナーレを飾り、次の100年の未来へとつなげる—そういうストーリーを描き、さらに、二期を通じて、川崎の多様な7区の「区の花・区の木」の魅力を余すことなく伝えることができました。

実際にやってみて、秋と春の間の期間も非常に重要でした。秋で取り組んだことを春にどう活かすか。考えながら準備を進める、「まいた種を芽吹かせるための見えない育みの時間」になったと思います。この期間にモチベーションを維持するための交流会などを実施しつつ、春に向けて新メンバーも加わり、結果的に大学生などの若い世代や新たな企業が参加し、フェア全体に新たな活力が生まれました。二期開催にしたことで、単なるイベントに留まらず、継続的な

つながりを生み出す仕組みへと発展したと感じています。

全国からの反響として、約50件の視察がありました。開催期間は53日間でしたので、単純計算でほぼ毎日視察があったこととなります。中でも印象的だったのは、全国の緑化フェアを訪ね歩く愛好家の方から、「これまでも複数拠点の開催例はあるが、3拠点それぞれに物語性を持たせ、全体を一つのストーリーとして構成しているのは『かわさきフェア』が初めて」という言葉をいただいたことです。川崎ならではの挑戦を評価いただけたことが、とても嬉しかったです。

初の二期開催、コア会場が3つと、ミニ緑化フェアを6回開催するほどのボリュームと、手探りの連続でしたが、市制100周年記念の象徴的事業として、約400の実行委員会メンバー、ボランティア、来場者と、みどりでつながった経験は大きな財産であり、次代のグリーンコミュニティ形成への大きな一歩になったと実感しています。

象的であった。何より「かわさきフェアをより良いものにしていこう」という熱い気持ちがあふれる会となった。多世代がともに活動し、花を通じて来場者やスタッフ、地域団体、ボランティア同士と様々な交流を行う時間は、運営する私たちにとっても非常に有意義で楽しい時間となった。

また、フェア終了後も、約6割のボランティア登録者からみどりの活動に関する情報提供を希望する声があり、現在も定期的に情報提供を行っている。学校での出前講座や市役所通り花壇の植替えをはじめ、令和7(2025)年10月の市民150万本植樹運動植樹祭では、かわさきフェアのボランティアが一般参加者の植樹をサポートするなど、継続して多様なみどりに関する活動に参加している。

8 100年先の未来へ

かわさきフェアの開催は、基本理念が示すとおり、単なる一過性のイベントではなく、次の100年を見据えた大きな挑戦であった。今も継続する小・中学生による花苗育成や地域での花かざり、ボランティアによるみどりの活動などはほんの一例に過ぎない

が、こうしたフェア後も続く、みどりによって生まれた取組、そして市民総参加型のフェアで生まれた「つながりの輪」、その一つひとつがフェアのレガシーとして、次の100年先へとつながり、みどりのまちづくりに向けた確かな礎となる。

「みどりのKAWASAKI宣言」に掲げた都市と自然の共生を進める川崎の決意を具現化していくためにも、川崎とともに暮らし、働き、学ぶ全ての人々とともに、次の100年先の川崎の未来に向けて、新たなステージへと歩みを進めていかなければならない。

また、市民、企業、行政など多様な主体が参画し、みどりを守り、育て、活用する取組を展開するプラットフォームとしてグリーンコミュニティを形成するとともに、都市部の川崎だからこそ実現できるモデルを確立し、川崎がリードして他の都市へ波及させていくことも重要となる。

かわさきフェアは、訪れた全ての人々が「みどり」について改めて考えるきっかけとなり、みどりを通じて人と人、人とまちをつなぎ、都市の暮らしにみどりを根付かせる第一歩となった。フェアでまいた種を芽吹かせるために、このつながりの輪を更に広げ、100年先の未来に向かって、着実に歩みを進めていきたい。

■ 極限の緊張がほどけた瞬間 — 佳子内親王殿下をお迎えして —

本市では初となる公式な皇室行事であり、極めて緊張感が伴う大任でした。御臨席に向けては、専任チームを編成し、分刻みのスケジュールや通行ルート設計、警備・安全対策を徹底し、緻密かつ厳格な計画を何度も何度も見直しました。

当日は、私が全体誘導と調整役として終始おそばに控えていましたが、最後に佳子内親王殿下から直接、温かい労いのお言葉を賜った瞬間、張り詰めた緊張がほどけ、殿下のお人柄に深い感銘を受けた、人生で忘れられない瞬間となりました。

■ かわさきフェアの振り返りから グリーンコミュニティの形成に向けて

「川崎らしいみどり」を育てていくためには、都市での暮らしにみどりがどう関わるかという視点がとても重要だと思います。どれほど美しい花畑をつくっても、そのみどりが生活に結び付かなければ、人々の「自分事」にはなりません。職場や学校、自宅との往復の中で、ふと身近なみどりや川崎を意識するきっかけをつくりたい。それがフェアの大きな狙いでした。

フェアをきっかけに、花をかざってみようかな、身の回りに目を向けてみようかな、そんな小さな気づきが自分たちの住む地域やまちへの関心につながるとよいと。

みどりは、あらゆる人やものをつなぐ媒介です。日常の中で季節ごとの川崎のみどりを感じたことを通じて、多くの人々にとって川崎というまちを意識するきっかけになったのであれば、フェアの大きな目的は果たせたのだと思います。これからも、身近なみどりに気づききっかけづくりに継続して取り組み、みどりを通じて人と人、コミュニティが広がる仕組みをつくっていきたいと思います。

また、みどりを通じて市役所全体が連携・協力できたことも、フェアの大きな意義です。フェアで試みた「産業×みどり」「音楽×みどり」など、異分野の掛け合わせからは、みどりの持つ媒介と調和の力を改めて実感しました。

自然環境を守り育てることはもちろん大切ですが、まずは関心を持ってもらうこと。そのきっかけを継続的に提供し、みどりの持つ力を活かしながら、次の100年に向け、持続可能なグリーンコミュニティを育てていきたいと考えています。